

実験に参加しており、総合的な職種間連携 (IPW: Inter-professional work) の体制がとられている。実験開始後3ヶ月の時点で行われた参加者へのアンケート調査によって、「事前に対処を考えて訪問できる」「情報を得ることで指示や処置がスムーズに行える」といった情報共有によるケアの効率性の向上や、職種間の親密性への効果をあげる評価が見られた。また、「他の情報が伝わることでケアの仕方が統一できる」「状況に応じた対応方法が把握できる」といった実験システムの活用に伴う参加者の意識変化を示唆する結果も得られている。デメリットとしては、入力にかかる仕事量の負担、業務時間内での入力の困難など、パソコン操作の不慣れによる仕事の増加などが挙げられたが、その後も本システムが継続利用される中で解決されてきたと報告されている。

以上、ITを活用したケア情報の共有に関する既存の実証実験の試みを概観したが、これらに共通してサービス提供者の側の情報利用の側面のみが取り上げられており、介助・援助を受ける当事者の側の受け止めに関する検証が皆無であることが注目される。先の実証実験の報告において小関 (2002) は、「情報共有と連携がとれた状態を維持するためには、サービス機関側の単なる自己満足に終わることのないように、利用者や介護者の意見や要望を常に取り入れることが可能な情報化が望まれる」と結んでいるが、

そのための方法・アプローチについては何も述べられていない。この問題については事項で取り扱う。

3-3. 援助者-被援助者のあいだの関係発達とコミュニケーションの観点から  
介護・援助のワークの現場において、「情報共有」の議論に情報の当事者である被援助者の視点が抜け落ちていることが多かった。それには、医療・看護の専門家でない、あるいは意識障害などの制約のために情報共有に関与することが難しいといった、被援助者の側の事情があることは確かである。しかし、本研究の拠って立つ関係発達論 (鯨岡, 1999) および状況的認知からの学習論の観点からは、それらの制約を越えて、当事者である被援助者を含んだコミュニケーションの場が、徐々に被援助者のニーズに添った応答性のある環境になっていくことが望まれる。

吉野・石倉・大泉ほか (2001) は、重症心身障害児 (者) の意思を理解するために、経験年数の異なるグループ職員が観察と検討を繰り返し行う事例的な実践研究の中で、被援助者の限られた動作をサインとして読み取り、本人の要求内容を理解するための情報共有が促進されたことを報告している。特筆されるのは、情報を共有化し誰もが同じレベルで対応できるようになったことで、重度の脳性麻痺を抱える被援助者にとって心地良い環境を整えることがつながった可能性が

ある事である。

これとは異なった場面であるが、加藤(1995)は、カウンセラーの都合によってカウンセリングが終結したり、次の相談機関に引き継がれるときに発生するカウンセラー、クライアントの双方に起きる不安などの心理機制と両者の関係について考察している。クライアントにとって、引き継ぎとはカウンセラーとの別れによる分離不安に加えて、新奇な場方に望む不安が加わると言う。「引き継ぎ先はどのように自分を扱うかといった未知への不安、今のところでなぜいけないのかという疑問、見捨てられた感じなどから沸き上がる怒りなどの、別れに伴う不安を経験」し、さらに新たな関係をつくる負担が加わる場面となる。このような陰性の感情の生じやすい引き継ぎに際しては、クライアントの自己能力感を高めるような「治療同盟」を強調すること、新しいカウンセラーとつなぐだけでなく、学校、家族などクライアントをとりまく環境の関係を固め、機関内の調整を行うことを推奨している。

その他に援助者-被援助者のあいだのコミュニケーションに関わる側面として、自己開示への抵抗感や自尊心に関する社会心理学的な検討があるが、介護や援助の場面に特定される実証研究はきわめて少ないのが現状である。また、ITを利用する情報共有の場合、直接本人に接する前に形成される対人印象が、その後の現実の相互作用に影響を与える可能

性などの問題も考えられる。新たな道具を導入することによって、援助者-被援助者の関係にどのような変容が起り、それが両者のコミュニケーション過程に発達の方向への変化をもたらすための条件について、今後更なる検証が必要である。

引用文献(文献リストに掲載されたものを除く)

上野直樹 1999 仕事の中での学習：状況論的アプローチ 東京大学出版会

鯨岡 峻 1997 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房

鯨岡 峻 1999 関係発達論の構築：間主観的アプローチによる ミネルヴァ書房

#### 4 文献リスト<sup>注2</sup>

##### 4-1 {コミュニケーション} × {障害} × {介助}

鎌田一雄・山本英雄 2003 障害者のコミュニケーション支援技術に関する一考察 電子情報通信学会技術研究報告 103(496) p7～12

小澤邦昭・大坂浩・田中英之(他)

注2:

- \* リストの掲載順は刊行の新しい順。
- \* 2. 以降のリストでは、それより前のリストに挙げた文献の掲載を省略している(重複を避けるため)。

- 2003 身体障害者・高齢者とのコミュニケーションへのアプローチ（特集 健康で豊かな高齢社会を支援するトータルソリューション）日立評論 85(10) p683～688
- 岡田弥 2002 視覚障害者もモバイルの時代（特集 生活を支援する福祉用具）ノーマライゼーション 22(11) p22～24
- 山田弘幸 2002 聴覚障害をもつ方のコミュニケーションを支援する機器やシステム（特集 生活を支援する福祉用具）ノーマライゼーション 22(11) p26～30
- 元田美幸・藤田継道・成田滋 2002 重症心身障害児施設における利用者と介助者のコミュニケーション——セルフモニタリングチェック紙の効果 特殊教育学研究 40(4) p389～399
- 牛嶋益子 2002 口腔ケアで摂食・嚥下障害を改善——患者の意思を読みとりながら（特集 食べることをもっと豊かに）精神科看護 29(11) p33～38
- 山下幸子 2002 調査報告 重度心身障害者と介助者とのコミュニケーションに関する質的研究 社会福祉学 43(1) p227～236
- 大杉成喜 2002 コミュニケーション支援が変わる：個人情報端末の利用（特集 障害児教育がITで変わる（前編）動き始めた現場からの報告）発達 23(91) p33～41
- 笹本健 2002 研究最新情報 肢体不自由を伴う重度・重複障害児（といわれる子ども）の「身体の動き」の教育的課題について——STA（表出援助法）研究が提起したもの 特別支援教育 6 p60～63
- 市川熹 2002 障害者に対するコミュニケーション支援（特集 ことばのコンピュータピア——人間との対話を目ざして）言語 31(3) p72～77
- 牧野泰美・松村勘由・青山新吾（他） 2002 自主シンポジウム20「関係」への援助と言語指導（その2）コミュニケーション障害研究・実践における「関係」の意味を探る（日本特殊教育学会第39回大会シンポジウム報告）特殊教育学研究 39(5) p109～111
- 山形積治・中津真弓 2002 重症心身障害者のネットワークによる社会参加の諸問題——施設入所者のホームページ作成支援に関わって（ヒューマンコミュニケーショングループ（HCG）大会 特集：福祉情報工学と画像処理、一般）電子情報通信学会技術研究報告 101(702) p1～6
- 小沢昭彦 2001 精神障害者の雇用支援における個人情報伝達 職業リハビリテーション 14 p9～16
- 中邑賢竜 2001 コミュニケーションエイドと心理学研究（特集 障害

- と支援技術) 心理学評論 44(2)  
p124 ~ 136
- 巖淵守 2001 ユニバーサルなコミュニケーションツールとしての情報技術——通文化的双方向会話を目指して(特集 障害と支援技術) 心理学評論 44(2) p195 ~ 209
- NormanAlm 2001 普遍的問題としてのコミュニケーション障害——巖淵論文に対するコメント(特集 障害と支援技術) 心理学評論 44(2) p210 ~ 214
- 鎌田一雄・畠山卓朗・高内寿夫(他)  
2001 障害を持つ人達へのコミュニケーション支援に関する一考察——コミュニケーションツールの概念について 電子情報通信学会技術研究報告 101(486) p15 ~ 20
- 鎌田一雄・平木千沙子・矢野正広  
2001 障害を持つ人達へのコミュニケーション支援に関する一考察——メディアコミュニケーションと地域支援(画像情報システム) 映像情報メディア学会技術報告 25(52) p39 ~ 46
- 鎌田一雄・平木千沙子・矢野正広  
2001 障害を持つ人達へのコミュニケーション支援に関する一考察——メディアコミュニケーションと地域支援 電子情報通信学会技術研究報告 101(267) p39 ~ 46
- 神戸口亜樹・川島里美・中村史絵  
2001 現場から 活動レポート 意思表示困難な患者の安楽な体位変換——カンファレンスがケアにもたらす効果 看護学雑誌 65(5) p485 ~ 487
- 吉野綾子・白倉奈奈・大泉敬子(他)  
2001 重症心身障害児(者)との意志疎通を円滑にするための取り組み—職員による観察と情報共有にもとづく対応 臨床看護研究の進歩 12, p130 ~ 136
- 財部盛久 2000 話しことばのない精神遅滞幼児をもつ母親に対するビデオ・フィードバックと自己記録を用いたコミュニケーション支援 琉球大学教育学部障害児教育実践センター-紀要 2 p45 ~ 59
- 今野義孝・衛藤祐司・有川宏幸(他)  
2000 自主シンポジウム 動作的アプローチによる自閉性発達障害児のコミュニケーションの援助をめぐって(日本特殊教育学会第37回大会シンポジウム報告) 特殊教育研究 37(5) p248 ~ 250
- 川住隆一・石川政孝 2000 事例報告 コミュニケーションの意欲と伝達手段の向上を目指した重複障害児に対する教育支援の経過 国立特殊教育総合研究所研究紀要 27 p55 ~ 66
- 瀬島加代子 1998 発達障害児に対するコミュニケーション指導——ふざけ合い遊びを通して 特殊教育研究施設研究生研究報告 2 1 p1 ~ 10
- 今野義孝 1998 動作法による「なぞ

- り」と「表出」援助をめぐって(II 障害児の教育と臨床(針塚進[コーディネーター・司会]) p67) シンポジウム:「学校」教育の心理学教育心理学のこれから 高橋良幸編著 川島書店 p78~
- コミュニケーションの障害をもつ患者への援助の実際(焦点 コミュニケーションの障害をもつ患者の看護) 1997 看護技術 43(13) p26~71
- 木村真貴子 1997 ICUにおける筆記板の見直しと検討——固定式筆記板を作製して(焦点 コミュニケーションの障害をもつ患者の看護——コミュニケーションの障害をもつ患者への援助の実際) 看護技術 43(13) p57~60
- 発達臨床研究会 1997 人との関係に問題をもつ子どもたち—14—重度重複障害児へのコミュニケーション発達援助の一事例 発達 71 p94~101
- 本山愛子(他) 1995 筋ジストロフィー-患者のコミュニケーション方法の獲得と援助——Finkの危機モデルをとおして(言語障害のある患者の看護<焦点>——看護の視点) 看護技術 41(8) p67~72
- 国立特殊教育総合研究所編 1995 特殊教育シンポジウム「コミュニケーション障害への援助」報告書 平成6年度 国立特殊教育総合研究所編 (特殊研 D-99) 国立特殊教育総合研究所 1995.3
- 4-2 {コミュニケーション} × {介助} × {情報}
- 岡田美智男 2003 社会的相互行為論からみたCMC研究の新たな展開(人と人とのコミュニケーションを支援する情報メディア特集号) システム・制御・情報 47(10) p463~468
- 馬田一郎 2003 CMCにおける視覚情報——マルチモーダルな対人コミュニケーション環境の研究(人と人とのコミュニケーションを支援する情報メディア特集号) システム・制御・情報 47(10) p487~492
- 山西慎次・倉本到・渋谷雄(他) 2003 分散環境下での明示的情報提供によるインフォーマルコミュニケーションの活性化(第21回ヒューマンインタフェース研究会 コミュニケーション支援及び一般) ヒューマンインタフェース学会研究報告集 5(1) p65~70
- 荒井健一・伊東昌子・阿部真 2002 学級内コミュニケーション促進支援を目的としたモバイル情報システムの構築(特集 e-Learning, 一般) 電子情報通信学会技術研究報告 102(509) p73~76
- NTT 情報流通基盤総合研究所・NTT サ

- イバーコミュニケーション総合研究所 2002 R&D NOW 光ブロードバンドでカウンセラ相互の連携を容易にするテレワーク支援サービスの共同実験を開始 NTT 技術ジャーナル 14(5) p49～51
- 大塚真理子・大嶋伸雄・平田美和 (他) 2002 在宅要介護高齢者のケアマネジメントにおける情報共有化の効果に関する研究—ITを用いたWEBフォーラムの検証から— 埼玉県立大学紀要 4 p131～137
- 小関祐二 2002 IT活用によるケア情報共有の意義と展望—ケア情報共有システムの試作と運用実験を通して— 中国総研 6(3) p25-33
- 田中平行・西濱壽子 2002 情報ファイルによる視覚情報の共有化への取り組み 日本精神科看護学会誌 45(2) p98～102
- 深沢博美・中川ます子・桜田一子 (他) 2001 患者と時間を共有する意味—長期入院患者に自己表現を促す援助 日本精神科看護学会誌 44(1) p73～76
- 西山涼子 2001 非言語的コミュニケーションに焦点をあてた看護援助の効果—経時記録からの振り返りを通して 日本精神科看護学会誌 44(1) p521～524
- 塩村公子 2001 社会福祉援助技術を伝達する方法について(2) 岩手県立大学社会福祉学部紀要 4(1) p43～50
- Eric Vatikiotis-Bateson 2001 マルチモーダルコミュニケーション(けいはんな情報通信融合研究センター-特集—コミュニケーション支援環境の創造に向けて) 通信総合研究所季報 47(3) p79～84
- 狩俣正雄 2001 コミュニケーションと支援 大阪学院大学企業情報学研究 1(2) p197～219
- 柴田レイ子・折原威男 2001 チーム医療と記録方式(特集:看護はいまどこにいるのか—臨床看護) 看護展望 26(2) p61～65
- 小沢昭彦 2000 研究と実践報告 進行性筋ジストロフィ—者の就労支援における個人情報伝達 職業リハビリテーション 13 p18～24
- 塩村公子 2000 社会福祉援助技術を伝達する方法について(1) 岩手県立大学社会福祉学部紀要 3(1) p49～54
- 川住隆一・石川政孝 2000 事例報告 コミュニケーションの意欲と伝達手段の向上を目指した重複障害児に対する教育支援の経過 国立特殊教育総合研究所研究紀要 27 p55～66
- 刀川真 表出的コミュニケーションを支援する情報システム(特集:情報システムに関する様々な研究アプローチ) 情報処理学会研究報告 99(60) 1999.7.21 p11～16
- Patricia Benner・早野真佐子(訳)

- 1999 臨床知識の開発および目に見える看護実践のための「語り」の役割(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p24 ~ 29
- 川島みどり 1999 経験を語る意味——技術論をふまえて(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p30 ~ 33
- 渡辺裕子 1999 看護を物語ることの手効果(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p34 ~ 37
- 佐藤重美 1999 看護診断と語り(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p38 ~ 41
- 宮下多美子 1999 自らの体験を「語る」意味(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p42 ~ 45
- 佐々木睦美 1999 看護を「語る」愉しさと陥穽(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p46 ~ 49
- Suzanne Gordon・早野真佐子(訳) 1999 沈黙から発言へ——的確に「語る」にはどうすればよいのか(特集 看護を「語る」ことの手——ケアの全体像を認識し伝達する方法) 看護 51(5) p50 ~ 57
- 倉本到・宗森純・由井菌隆也(他) 1998 発想支援グループウェアの実施に及ぼすテキストベースコミュニケーションの影響(特集:分散協調支援とその応用) 情報処理学会論文誌 39(10) p2778 ~ 2787
- 李玄玉 1998 自閉症児における相互作用的伝達機能の考察 介護と福祉システムの転換 山本啓, 村上貴美子編 未来社 p149 ~
- 医療情報の開示による意思決定の場への患者の参入(特集 “患者中心のケア”の新しい試み) 1998 看護 50(3) p65 ~ 96
- 織奥キミエ・池田和子・早川幸子 1998 看護の過程における患者参与システムの現状(特集 “患者中心のケア”の新しい試み——医療情報の開示による意思決定の場への患者の参入) 看護 50(3) p73 ~ 78
- 太田美智子 1998 患者と主治医, 訪問看護婦で共有する「健康管理ノート」(特集 “患者中心のケア”の新しい試み——医療情報の開示による意思決定の場への患者の参入) 看護 50(3) p79 ~ 88
- 富岡久美 1997 構音障害により意思表示・伝達が困難な患者の看護(焦点 コミュニケーションの障害をもつ患者の看護——コミュニケーションの障害をもつ患者への援助の実際) 看護技術 43(13) p33 ~ 36

松原良子・横田喜久恵 1997 特集 “クライアント情報”の伝達と共有それが処遇の要!(ヘルパー編) ふれあいケア 3(9) p9～26

田中文代 1997 ワンランクアップKAIGO 的確な申し送りをめざして——聴覚より視覚のほうが10倍効果的な情報伝達ができる——熊本県・シルバー日吉 ふれあいケア 3(8) p32～37

八ツ橋武明 1991 パーソナル・コミュニケーションにおける映像情報の効用 情報研究 第12号 茅ヶ崎文教大学情報学部 p93～110

松井豊 1990 援助行動の意思決定における情報探索過程の分析(援助行動<特集>) 実験社会心理学研究 30(2) p91～100

#### 4-3 介助

中村幸子・寫末憲子・山内弥子(他) 2003 障害者の介護に求められるもの——障害者に対する介護労働に関する調査研究より 厚生指標 50(13) p1～7

湯浅美千代 2003 患者と介助者の相互作用による「食事のリハビリテーション」(特集 患者と介助者との相互作用によってつくり上げられる「食事のリハビリテーション」) Quality nursing (文光堂) 9(2) p100～103

荒木暁子 2003 食事場面における乳幼児期の障害児とその母親の相互作用を促進する看護援助方法——対象母子自身のビデオテープを用いて(特集 患者と介助者との相互作用によってつくり上げられる「食事のリハビリテーション」) Quality nursing (文光堂) 9(2) p104～112

鈴木智子・湯浅美千代 2003 嚥下障害のある高齢患者への食事介助がスムーズにできるまでのプロセス(事例1)(特集 患者と介助者との相互作用によってつくり上げられる「食事のリハビリテーション」) Quality nursing (文光堂) 9(2) p113～119

鈴木智子・湯浅美千代 2003 痴呆症のある高齢患者の食事介助が不要になるまでのプロセス(事例2)(特集 患者と介助者との相互作用によってつくり上げられる「食事のリハビリテーション」) Quality nursing (文光堂) 9(2) p120～124

桑田美代子 2003 患者のペースに合わせた食事介助を可能にする看護管理(特集 患者と介助者との相互作用によってつくり上げられる「食事のリハビリテーション」) Quality nursing (文光堂) 9(2) p126～133

富山由紀子 2002 「介護上のニーズのとらえかた」と指導の課題——食



- 事の介助実践に関して 順正短期大  
学研究紀要 31 p85～97
- 松山光生・白垣潤・山中克夫(他) 2001 資料 介助サービス利用者・  
介助者間におけるトラブル認知の  
ズレ——自立生活センターにおけ  
る調査をもとに 特殊教育学研究  
39(2) p53～63
- 伊藤智宏・小柳剛・目加田慶人(他) 2000 音声と映像を利用した肢体  
不自由者ケアシステム 映像情報メ  
ディア学会技術報告 24(28) p23  
～28
- 伊藤智宏・小柳剛・目加田慶人(他) 2000 音声と映像を利用した肢体  
不自由者ケアシステム 電子情報通  
信学会技術研究報告 100(7) p23  
～28
- 倉田康路 1993 [研究論文] 盲老人  
ホームにおける入所者介助に関する  
研究 老年問題研究 Vol. 14No. 1 特  
集: ゴールドプランにおけるマンパ  
ワー対策 長岡 医療と福祉総合研究  
会 p79～93
- 田端光美・菊池信子 1986 障害者の  
介護・介助ニーズの実態と特徴——  
東京都A区における実態調査から  
社会福祉(日本女子大学文学部社  
会福祉学研究会) 26 p79～96
- 浪江久美子 1981 日常生活動作の介  
助者・被介助者に関する研究(臨床・  
障害) 日本教育心理学会発表論文  
集 第23回総会 日本教育心理学会
- 第23回総会準備委員会
- #### 4-4 引き継ぎ
- 中村小松 2002 引き継ぎがうまく  
いったとき、いかなかったとき(特  
集2 "気になる子" をどう引き継  
ぐか) 月刊学校教育相談 16(4)  
p36～39
- 水沢弘代 2001 視聴覚記録を通して  
看護の継続を図る——ビデオ添書に  
よる看護の引き継ぎ(特集 ケアの  
質を支える記録) 看護管理(医学  
書院) 11(8) p587～590
- 前田さか枝・柳町紀子・平瀬加世子  
(他) 2001 症例研究 高齢者のス  
ト-マケア自立のための地域との連  
携——ビデオを用いた引き継ぎを試  
みて[含 研究の焦点] ウロ・ナー  
シング 6(5) p473～478
- 加藤尚子 1995 カウンセラーの都合  
による終結・引き継ぎについて——  
心理機制と関係の在り方をめぐって  
立教大学教育学科研究年報 39  
p73～85
- #### 4-5 申し送り
- 國岡照子 2003 看護実践における情  
報伝達と申し送り(特集 今こそ再  
確認! 申し送りの要点) 消化器外  
科 nursing 8(4) p314～323
- 馬場志静香・荒田美幸・西村幸子(他)

- 2002 ケアスタディ 申し送り廃止に向けてのワークシートの一考察  
Brain nursing (メディカ出版) 18(11) p1148 ~ 1151
- 中込好美・筑後幸恵 2002 申し送り廃止前・後における送り手と受け手の気持ちの変化(第39回 全国自治体病院学会 看護分科会推薦演題(於:札幌)) 看護の研究(全国自治体病院協議会) 33 p194 ~ 196
- 羽石洋子・福田京子・鈴木はるみ (他) 2001 申し送りの現状と問題点——情報収集に関する実態調査から 日本看護学会論文集 看護管理(日本看護協会 日本看護協会出版会) 32 p183 ~ 185
- 田村江利子・久米村利恵・上平留美子 (他) 2001 経験のある看護婦と無い看護婦の情報収集能力及び方法の違い——申し送り廃止に伴う問題点解消への提言 日本看護学会論文集 看護管理(日本看護協会 日本看護協会出版会) 32 p261 ~ 263
- 肥後功一 2001 送ることば——臨床過程における対象共有としての「申し送り」の分析 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学 35 p63 ~ 70
- 川島みどり 2001 インタビュー- 申し送り——17年前の問題提起と現在(連続特集 問題解決シリーズ 看護業務編(1) 申し送り新時代) 看護実践の科学 26(1) p12 ~ 17
- 永井千賀子・荒井千芽・城川奈津江 (他) 2001 看護支援システムを活用しての申し送り(連続特集 問題解決シリーズ 看護業務編(1) 申し送り新時代) 看護実践の科学 26(1) p25 ~ 30
- 川島登志子・宮地洋子 2001 申し送り時間の短縮をはかる看護ワークシートの活用(連続特集 問題解決シリーズ 看護業務編(1) 申し送り新時代) 看護実践の科学 26(1) p37 ~ 42
- 参考資料「申し送り」に関する特集一覧——「看護実践の科学」1984~(連続特集 問題解決シリーズ 看護業務編(1) 申し送り新時代) 2001 看護実践の科学 26(1) p43 ~ 45
- 横田喜久恵 1990 なぜ申し送りが必要か 何を申し送るのか(どうすれば効果的な申し送りができるか<特集>) 季刊老人福祉 88 p10 ~ 12
- 申し送り・再考——看護ケアの充実のために<特集> 1985 看護学雑誌 49(6) p626 ~ 651
- 牧野典子・日比野路子 1981 「申し送り」についての教育的考察 静岡女子短期大学研究紀要 29 p101 ~ 111
- 中村サエ子(他) 1980 申し送りの検討 共済医報 29(3) p463 ~ 465

4-6 対人認知

- 石川真 2003 CMC 場面における顔画像付加が対人認知に及ぼす影響 上越教育大学研究紀要 22(2) p343 ~ 355
- 石川真 2003 対人認知の印象形成モデルに関する研究 上越教育大学研究紀要 23(1) p23 ~ 33
- 川西千弘 1998 対人認知における顔の機能（〔対人行動学研究会〕第18回研究発表記録——ワークショップ B「社会的認知研究の最近の動向」）対人行動学研究 16 p18 ~ 20
- 吉村英 1987 対人認知における体制化のメカニズムと印象の残りやすさに関する研究（自己知覚〈特集〉）実験社会心理学研究 27(1) p47 ~ 58
- 長田雅喜・林春男 1982 対人認知・対人関係と帰属（帰属・態度形成〈特集〉）心理学評論 25(3) p249 ~ 262

4-7 他者認知

- 安藤満代・吉岡久美子 2001 資料介護と看護における被援助者の自己認知と援助者による他者認知 カウンセリング研究 34(1) p43 ~ 51

4-8 自己開示

- 熊野道子 2002 自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違 教育心理学研究 50(4) p456 ~ 464
- 北田隆 2000 ホームページにおける自己開示の規定因に関する基礎的研究 文化研究（樟蔭女子短期大学）14 p11 ~ 24
- 片山美由紀 1996 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究 67(5) p351 ~ 358
- 小口孝司 1996 自己開示のモデル化の試み(2) 学苑（昭和女子大学近代文化研究所）673 p45 ~ 54
- 森下高治 1995 自己開示に関する基礎的研究(1)——聞き手と話し手の問題 大阪産業大学産業研究所所報第18号 大阪産業大学産業研究所 p87 ~ 107
- 小口孝司 1995 自己開示のモデル化の試み—1— 学苑（昭和女子大学近代文化研究所）666 p60 ~ 65
- 遠藤公久 1995 自己開示における抵抗感の構造（資料）カウンセリング研究 28(1) p47 ~ 57
- 高木浩人 1992 自己開示行動に対する認知と対人魅力に関する研究——親密な関係と親密でない関係の比較 実験社会心理学研究 32(1) p60 ~ 70

#### 4-9 自己呈示

有倉巳幸 1991 パブリシティの程度が自己呈示に及ぼす効果——表出以前の認知過程の検討 広島大学教育学部紀要 第1部 40(心理学) p127 ~ 132

#### 4-10 対人×印象

伊沢利文 2000 処理目的が対人認知に及ぼす効果について 学習院大学人文科学論集 9 p189 ~ 206

潮村公弘 1995 ステレオタイプの認知とカテゴリ-化情報の関係について——対人記憶, 印象評定に及ぼす刺激手掛かりの効果 実験社会心理学研究 35(1) p1 ~ 13

篠塚寛美・浜保久 1990 行為情報に基づく対人印象形成過程の実験的研究 社会心理学研究 5(1) p12 ~ 21

猪股佐登留 1983 印象形成に関わる情報処理過程の研究(社会・集団対人認知) 日本心理学会大会発表論文集 第47回 日本心理学会第47回大会準備委員会

横川和章 1981 印象管理に関する実験的研究(社会・集団 対人認知) 日本心理学会大会発表論文集 第45回 日本心理学会第45回大会準備委員会

安藤清志 1980 自己開示と対人認

知——自己開示行動が開示者の被開示者に対する印象に与える影響について 東京大学教養学部人文科学科紀要 72 p97 ~ 112

松原敏浩 1979 印象管理についての研究——対人特性の影響について 大同工業大学紀要 14 p1 ~ 5

松原敏浩 1977 印象管理の研究 2 印象管理と対人魅力(研究発表 社会) 日本心理学会大会発表論文集 第41回 日本心理学会第41回大会準備委員会

千野直仁 1975 対人態度における認知と感情との関連性についての一考察——印象形成研究の批判的考察とその新しい試み 愛知学院大学文学部紀要 5 p52 ~ 62